

市場と権力

7月15日にレポートで紹介した写真上の『資本主義と闘った男』
「はじめに」のなかで、著者のジャーナリスト佐々木実（ささき みのる）は次のように書いている。

私は6年ほど前、日本における「社会の市場化」プロジェクトの最大の功労者である竹中平蔵という経済学者の人生の歩みを追ひ、（写真下の著書）を上梓した。小泉純一郎内閣の経済閣僚として「構造改革」の司令塔役を果たした彼は現在もなお、安倍晋三首相のブレインとして活躍をつづけている。

竹中が研究者の駆け出し時代に過ごしたシンクタンクの指導者だったこともあり、宇沢（弘文）は若き日の彼の行状をよく知っていた。「彼はね、本質的には、経済学者ではないんだよ」。

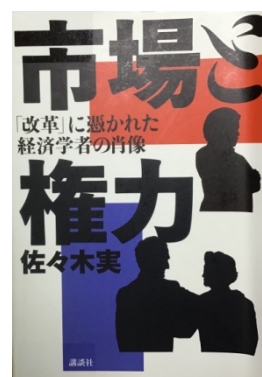
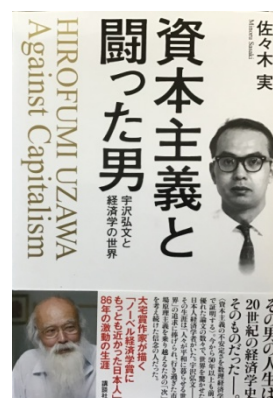
宇沢弘文先生の言葉から、「改革のメンター（指導者）」竹中平蔵の人生の足跡をたどったレポートである本書に注目した。紹介したいことは多いが、著者が竹中の処女作をめぐる事件の顛末を聞くために、宇沢先生の自宅を訪ねたところから。

宇沢先生は「設備投資研究所はリベラルな雰囲気をつくってやっていこうということで運営していたんです。竹中君の一件はそれを傷つけちゃったようなところがあってね。……彼の一件についてはもう話もしたくない、というのがぼくの率直な気持ちです」と語る。竹中の処女作をめぐる、共同研究を自分だけの成果にして出版した、「研究者」にあるまじき事件である。博士号取得の件を含め、ここに竹中という人物の性格がよく表われている。

本書冒頭から。「成長戦略に打ち出の小槌はなく、企業に自由を与え、体質を筋肉質にしていくような規制改革が成長戦略の1丁目1番地」 2013年1月23日、安倍政権が新たに設置した産業競争力会議の初会合で、民間議員である竹中平蔵はさっそく宣言した。かつて小泉政権で「構造改革」の司令塔役を果たした彼にとっては久々の表舞台だった。（そして、終章の最後で再び）

竹中は、産業競争力会議には「慶應義塾大学総合政策学部教授」という肩書で参加している。役所の分類でいうと、学識経験者である。だが、彼には別の顔がある。人材派遣業界の大手企業、パソナグループの取締役会長をつとめている。労働市場を営業の場とする企業グループの経営者でもあるのだ。不思議なことに竹中の話は、日本社会の改革を語りながら、パソナの市場開拓戦略にもなっている。

彼が語る「構造改革」においては、経済学者の立場、企業経営者としての立場、両者の立場が混然一体として齟齬なく同居している。



(2019年7月28日)